私にとっての平和

多文化社会学部４年　永江　早紀

１．はじめに

皆さん、こんばんは。長崎大学多文化社会学部４年の永江早紀といいます。私の発表に入る前に、いくつか皆さんにお尋ねしたいことがあります。平和って言葉が、今日たくさん出てきたと思います。皆さんにとっての平和をちょっとお尋ねしたいと思います。

「私は、いま平和な毎日を生きているよ」と言う方。「平和って聞いたら、ちょっと重くなる」と言う方。「平和って聞いたら、楽しくなる」と言う方。「私、いま平和な世界に生きている」と思われる方。ありがとうございます。「平和」という言葉、よく聞く言葉だし、よく使う方も多いと思いますが、考えれば考えるほどとても深い言葉でなかなか定義づけできない言葉だと思います。私は平和という言葉と、この２、３年間、関わってきました。私が携わってきた活動を通して見てきた平和というものを、今日は少し紹介したいと思います。

２．学生生活を通した取り組み

私はナガサキ・ユース代表団という人材育成プログラムに携わっています。この人材育成プログラムは、主に「核兵器廃絶」をメッセージに、そういった思いを継承するためにつくられた人材育成プログラムです。

具体的には、まず核兵器情勢を学び、核兵器を広げないようにするための会議に参加します。また、派遣先で Peace Caravan という平和出前講座を行います。他にも政府関係者と会って話をしたり、プレゼンテーションを行ったりという活動をしています。私はナガサキ・ユース代表団に２年間携わり多くのことを学んできましたが、その中でも平和という概念の中心的な意味は、ここでは disarmament、軍縮でした。軍縮とは軍備を縮小することですが、ここで言うと核軍縮をすることが国際会議における平和な世界とか、平和という概念ということを経験しました。

もう一つ、私が携わっている活動にPeace Caravan隊というものがあります。長崎は被爆の歴史を持った場所ですが、その歴史と今日の核兵器情勢とがどういう関係にあるのかというのが、義務教育の中で説明が欠けているのではないかという問題意識を持った学生が始めた活動です。活動は学生主体で行われており、過去の被爆という歴史を学びながら現在の核兵器情勢を学び、そして、これからのことを考えていくというこれまでにはないスタイルの新しい平和学習プログラムです。私たちが行う授業の主な形態は、「過去、現在、未来」で大きくセクションを分け、過去の歴史としての被爆の実相、それから現在の核兵器情勢をプレゼンテーションを通して分かりやすく講義をします。そのあとに行うのが、これまでの平和教育ではあまりなされてこなかった、「ディスカッション」です。ここでは、毎回参加者の年齢や興味関心に合わせてテーマを設定し、ディスカッションを行います。場合によってはディベートになることもあります。これらは、学んだこと、思ったり考えたことをアウトプットする時間になります。過去、現在の出来事はすでに起こっていることを私たちが一方的に説明しますが、これからの未来のことは、子供たち自身が中心となって考えてもらい、その意見を交わしてもらいます。

この活動に携わるなかで、私が感じたここでのpeaceは「知ること」と「考えること」でした。子どもたちにとって、まず自分たちが生きているこの場所で74年前に何が起きたのか、今自分たちが生きている世界で何が起きているのか、ということを知ることはすごく大切です。それは次のステップである「考える」ことにつながるからです。アウトプットの時間では、その考えたことをお互いに意見交換します。自分の考えを他者に説明するなかで頭の中が整理されます。また、他者の意見を聞くことで、新たなアイデアが浮かび上がります。このように、多様なメンバーと意見交換することで、一緒に平和や核兵器について考えていきます。このプロセスそのものが、彼らにとっての平和というものを生み出すのではないかと、この活動を通して強く感じました。

もう一つは、ハワイのパールハーバーでのインターンシップです。ここでは、主にパールハーバー内の展示物を見て、どういう展示や説明が欠けているのか、より良い博物館にするためにはどうすればいいのか等について、毎日ディスカッションを行いました。また、ハワイには平和教育にまつわる教育機関があります。そういった機関を訪問しながら、そこで働いている教育関係者の方と交流をしたり、現地の高校に出向いて平和教育にかんする出前講義をしたりしました。

私がここで感じたpeaceとはハッピーでいることでした。ハッピーという言葉はすご

くわかりやすく単純な意味ですが、ここで大事なのはこのハッピーでいるには、「自分」というものが主軸になっていなければいけないという条件があることです。私が出会ったパールハーバーで働く方々は、日本で生まれ育った私が知っている戦争博物館で働く人々と雰囲気やイメージが大きくかけ離れていました。パールハーバーでは、毎日、お互いに声を掛け合って、時には来訪者にもフレンドリーに話しかけて、みんながそれぞれ楽しそうに働いていました。お世話になった教育ディレクターの方もとても楽しそうに教育事業を行っていました。その姿に最初は正直すごく驚かされました。なぜなら、パールハーバーもまた、戦争によって多くの犠牲者が生じた場所であり、日本であれば厳粛な雰囲気に包まれていることが一般的だったからです。そんな彼らも戦争に関するディスカッションになると真剣に、そして前向きに意見を述べます。これは平和教育を重く考えてきた私にとって、すごく新鮮でした。彼らも私たちと同様に過去の出来事を真剣に受け止めています。しかし、その次のステップである「自分ごととして捉える」ことが、私の受けてきた平和教育には欠けていた部分なのかもしれないと考えました。パールハーバーで楽しく働くスタッフは、そこで起きた過去の出来事を十分に理解しています。しかし、その過去のことを悲しい出来事だったという認識で留めず、今その場所で働いている自分と関連付けて考えることができていました。それが、「悲しい」出来事があった場所にもかかわらず、皆が楽しく働くことができ、来訪者を笑顔で迎え入れられる雰囲気につながっているように感じられました。パールハーバーは、過去の悲劇を悲しむためだけの場所ではないということです。平和な未来についても考える場所であるからこそ、そこで働くスタッフは笑顔でサービスを提供されているように考えました。

誰だって過去に起きた悲劇を知ると悲しい気持ちになります。それは長崎でも同じです。しかし、その事実を知って「悲しい」だけで終わらせる学びは、その事実を知る意味もその歴史を引き継いでいく意味も十分なものではありません。そのような悲劇がなぜ起きたのかを多角的に考え、今いる私たちの世界やこの先の未来においても繰り返されないために何が出来るのか、自分事として考える必要があります。

私がパールハーバーでのインターンを通して「ハッピーでいること」が平和だと感じたのは、このようにそれぞれの人が「自分らしく」笑顔で働いている姿に触れられたからです。加えて、その自分らしさは過去の出来事を知り、学んだうえで自分はどうあるべきかを考えた結果でもあると思いました。

先述したように、私は国連で平和についてプレゼンテーションを行いました。そのなか

で、私の大好きなものを表現した図を出しました。大好きな食べ物やペットなどを思いつくままに表現しました。見れば見るほど、バカバカしいことをいっぱい書いていたとは思います。しかし、自分にとっての平和とは、つまりこういうことだと考えます。私にとって、平和活動をやってきた原点には、単純ですが、こうした自分を形成している大切なものを守りたいという気持ちがありました。このように、「自分」を軸において生み出した「平和」とは、私にとって、とても大切にしていることを大切にするということだと気づかされました。

3．最後に

平和の定義は多岐に渡ります。平和に関する活動を通して、色々な方と出会いました。その都度、平和の定義は異なります。100人いれば100通りあると思います。その違いが生まれた理由を彼らとの会話のなかから探っていくと、その国ごとの歴史や教育が大きく関係しているのではないかなと考えるようになりました。過去にあった出来事、その土地で暮らす人々が一つずつ積み上げられて出来てきたものが歴史です。それらが今の自分につながっていることについて、考える機会を持つことが重要だと考えます。その際、特に重要なのは、「現在」を生きる私たちがどう行動していくかです。そのためには過去を知る必要があり、その過去を今の自分と関連付けて行動を起こし、未来を描いていくことが求められます。

私は、将来のことを考えるとすごくワクワクします。これまでの学びを通して、このワクワクする気持ちも、過去から現在までの積み重ね、そしてそれが同じように未来へ繋がっていくものだと気付きました。今、私にとっての平和とは、ワクワクできることだと考えています。